

佐紀と、おみなえし・かきつばたの歌——覚書——

北谷 幸冊

佐紀は、現在の奈良市街地西北郊外にあたり、平城宮跡の北側に佐紀町の名を留めている。萬葉集では、「佐紀山」(二〇——一八八七)・「佐紀宮」(二——八四題詞)とあるほか、「佐紀」については、傍線部分をサキと訓むべきものと思われる「咲沢・咲野」・「生沢」・「開沼・開沢」との表記がある。これらの「咲」・「生」・「開」をすべてサキと訓んで地名とすれば、萬葉集にみえる佐紀の地の歌は、

佐紀山 一首 佐紀沢 三首 佐紀野 二首 佐紀沼 一首

を数える。佐紀山は、奈良山丘陵の西に列なる山、「佐紀宮」は、佐紀の地にあつた長皇子(天武天皇の第四皇子)の宮である。佐紀・佐紀沼は、佐紀の沼沢地で、現在の水上池(奈良市佐紀東町)の辺り、その周辺一帯を佐紀野と呼んだものと思われる。春日なる三笠の山に 月も出でぬかも 佐紀山に 咲ける桜の花の見ゆべく (二〇——一八八七)

と、佐紀山を歌う旋頭歌一首を除いて、佐紀を歌う六首にはすべて「をみなへし」または「かきつばた」(当時はカキツハタと清音)の語が冠されている。それらは、次の六首である。

- ① 娘子部四 咲沢二生流 花勝見 都毛不知 恋裳措可聞 (四一六七五)
- ② 姫押 生沢辺之 真田葛原 何時鴨絡而 我衣将服 (七一三三四六)
- ③ 姫部思 咲野尔生 白菅自 不知事以 所言之吾背 (二〇——一九〇五)
- ④ 事更尔 衣者不措 佳人部為 咲野之芽子尔 丹穗日而将居 (二〇——二〇〇七)
- ⑤ 垣津旗 開沼之菅乎 笠尔縫 将著日乎待尔 年曾経去来 (二一——二八一八)
- ⑥ 垣津旗 開沢生 菅根之 絶跡也君之 不所見頃者 (二二——三〇五二)

六首の、概要を表示してみれば、次のようになる。右の原文表記および以下の歌の書き下し表記は、小学館古典全集本に従う。

歌番号	部立	題詞	ラミナヘシ カキツハタの表記	サキ(サク) の表記	同時に詠まれて いる植物	作歌年代	作者
4 — 675	相聞	中臣女郎、大伴宿禰 家持に贈る歌 (五首の二)	娘子部四	咲 沢	花かつみ	天平年次未詳	中臣女郎
7 — 1346	譬喩歌	寄草 (二七首の二)	姫押	生 沢	(ま)葛原	未詳	未詳
10 — 1905	春の相聞	寄花 (九首の二)	姫部思	咲 野	白つつじ	未詳	未詳
10 — 2107	秋の雑歌	詠花 (二三首の二)	佳人部為	咲 野	萩	未詳	未詳
11 — 2818	古今相聞往来歌類	問答	垣津旗	開 沼	菅	未詳	未詳
12 — 3052	古今相聞往来歌類	寄物陳思 (二三九首の二)	垣津旗	開 沢	菅(の根)	未詳	未詳

二

先にあげた「咲沢」・「生沢」・「咲野」・「開沼」・「開沢」の訓みについては、すでに諸注釈書が解説するとおり、地名のサキのキは乙類・動詞咲キのキは甲類であるから、音韻に区別があり表記に相違があった。旧訓にサクと訓んでラミナヘシ・カキツハタの咲くところの沢(野・沼)と解されていたところを「萬葉代匠記」(精撰本)が「サキサハ」(「サキノ」・「サキヌ」と改めて、「大和國添下郡ノ佐紀ナルヘキニヤ」と説いたものを、「萬葉集攷證」(岸本由豆流)では、四一六七五において再び旧訓を復活させているが、現在の注釈書類においてもなお、これらの訓みは一定ではない。主な注釈書等の訓を表示すれば、次のとおりである。

歌番号	サキ(サク)の表記	訓					
4 675	咲 沢	①	②	③	④	⑤	⑥
7 1346	生 沢	サキサハ	オフルサハ	オフルサハ	サキサハ	オフルサハ	サキサハ
10 1905	咲 野	サキノ(又)	サクノ(又)	サクノ	サキノ	サキノ	サキノ
10 2107	咲 野	サキノ(又)	サクノ(又)	サクノ	サキノ	サキノ	サキノ
11 2818	開 沼	サキヌ	サクヌ	サキヌ	サキヌ	サキヌ	サキヌ
12 3052	開 沢	サキサハ	サクサハ	サクサハ	サクサハ	サキサハ	サキヌ

① 萬葉集古義・萬葉集新考(井上通泰)・萬葉集全釋・萬葉集私注・萬葉集注釋・朝日古典全書・桜楓社萬葉集(鶴久・森山隆)・小学館古典全集・新潮社古典集成・現代語訳万葉集(桜井満)

② 萬葉拾穂抄・萬葉集全註釋・岩波古典大系

③ 全訳注萬葉集
原文付萬葉集

④ 萬葉集評釋(窪田空穂)

⑤ 萬葉集略解

⑥ 口訳万葉集(折口信夫)

なお、『萬葉集総釋』では、六七五―サキサハ(石井庄司)・一三四六―サキサハ(窪田通治)・一九〇五・二二〇七―サキヌ(安藤正次)・二八一八―サキヌ(春日政治)・三〇五二―サキサハ(久松潜二)、『萬葉集全注』(既刊分)では、六七五―サキサハ(木下正俊)・一三四六―サキサハ(渡瀬昌忠)・一九〇五・二二〇七―サキノ(阿蘇瑞枝)と訓まれ、巻ごとに著者は異なるが、訓は右の表の①と同じ形での統一がみられる。

仮名遣いの誤りを認めながらもサキサハと訓むか、いわゆる上代特殊仮名遣いに従ってサクサハと訓むか、の見解のちがいによるが、前者によるべきであろう。ちなみに、巻一〇に「君に恋ひうらぶれ居れば敷野之秋萩しのぎさ雄鹿鳴くも」(二二四三)とあり、地名「磯城」のキは乙類、「敷(シキ)」のキは甲類と、仮名違いであるが、ここは「磯城の野の」の意と思われる。

三

「佐紀」に冠して、「をみなへし」・「かきつばた」を詠む歌六首を含んで、「をみなへし」の歌は集中一四首。「かきつばた」の歌は七首ある。それぞれ、

をみなへし 娘子部四・姫押・娘部思・姫部志・姫部思・佳人部為・美人部師・娘部四・乎美奈敵之・乎美奈弊之

かきつばた 垣津幡・垣津旗・垣幡・加吉都播多

と、さまざまに表記されている。以下、前掲の六首以外の歌もとりあげながら、思うところを述べることにする。

① をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも

(四一六七五)

題詞に「中臣女郎、大伴家持に贈る歌五首」とある内の一首で、右の六首中唯一作者を記す歌であるが、中臣女郎についての詳細は未詳である。作者は、若き日の大伴家持に恋した女性の一人で、作はこの折の五首のみ、家持の返歌は萬葉集には残されていない。「をみなへし」は、「佐紀沢」の枕詞。三句目の「花かつみ」までは、次にくる「かつて」を起こす序である。「花かつみ」については、こも・花あやめ・しようぶ・花しようぶ等と説かれている。この植物を尋ね歩いた松尾芭蕉は「いづれの草を花かつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋 人にとひ、かつみく」と尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ。」(岩波古典大系)と「奥の細道」に書き残している。白井光太郎氏の研究では、日光地方の「赤沼あやめ」がそれであるという。「かつみ」と「花かつみ」は別のものでも考えられているが、未詳。「かつても知らぬ」について、早く「萬葉代匠記」(初稿本)が「都」の用字に着目して、「かつて」に「義」があり、ここはスペテの意であることを説き、「萬葉集古義」が従っている。さらに、「萬葉集注釋」が、単に「以前には経験しない」というのではなく「今までまるで知らない」の意にとるべきであることを細かく説いているに従って理解

すべきであろう。結句は「恋愛措可聞」と女性の作歌に似あつた表記がなされている。一首は、中臣女郎の、家持への尽きぬ恋情を歌っている。

② をみなへし佐紀沢の辺のま葛原いつかも繰りて我が衣に着む

(七―一三四六)

「寄草」と題する「譬喩歌」一七首中の一首。原文に「生沢辺之」とある第二句を、『萬葉集古義』が「生澤邊之は、サキサハノベノと訓べし、(これを古来オフルサハヘノとよみたれども、ひがごとなり、こは己がはしめて考へ得たるよみなり、)」と言つて改めている。なおオフルサハヘノとの旧訓に従う説があるが、「生」は、諸注釈書が例に引く「吾が身一つに 七重花佐久 八重花生跡」(二六―三八八五)の「生」をサクと訓むことも考えあわせて、サキサハと訓むところと思われる。「ま葛原」は、文字通り「葛の茂る原」であるが、ここでは、作者が思ひをかけている少女を譬えている。「いつかも繰りて」とあるのは、葛のつるを手繰り寄せて繊維を採り、それで布を織ること。柿本人麻呂歌集所出の旋頭歌に「劍の後 鞘に入野に 葛引く吾妹 ま袖もち 着せてむ」とかも「夏草刈るも」(七―一二七二)がある。「衣に着る」とあるのは、女性を妻とすることを譬えている。めざす少女を自分のものとして、早く結婚できることを待ち望んでいる男の心情が歌われている。

③ をみなへし佐紀野に生ふる白つつじ知らぬこともて言はれし我が背

(二〇―一九〇五)

二句目の原文表記に「咲野」とあるのを、地名の「佐紀」と訓んでは仮名遣いの例に相違するので、サクノと訓んで「おみなえしの咲いている野」と解する説が、この表記の場合が多い(岩波古典大系・『萬葉集全註釋』・『全訳注 萬葉集』)が、仮名遣いの異例を認めながらもサキノとの訓に従う。三句目の「白つつじ」までは、次の「知らぬ」を起こすための序である。「春の相聞」に分類されているこの「白つつじ」の歌は、「をみなへし」とは花咲く季節があわない。季節が合わないことも、「をみなへし」の語を枕詞とみるひとつの根拠と言える。歌は、例えば「他人から非難されるような関係ではないのに、恋人が噂を立てられていることをいとしく思う歌」(小学館古典全集)と解され、中西進氏が「白つつじ」を「(おみなえしの咲く野に生える)白つつじのような私」(全訳注 萬葉集)と新しい解釈をしておられるほか、序の部分以下の解釈はほぼ一様に、相手の男性へのいとしさを歌っているものとしている。なかに、結句を「言はれし」で切つて、噂を立てられたのは作者であるとの説が『萬葉集略解』・『萬葉集古義』

にあり、「言われたよ、わが夫よの意」と説く『萬葉集総釋』（安藤次男）や『萬葉集全釋』が従っているが、「言はれし我が背」はひと続きと見るべきであろう。古く『萬葉代匠記』（精撰本）に「相見又サキヨリ人二名ヲ立ラル、事ヲ夫君ノ為ニ痛ムナリ」とあるが、私は、その上に、作者から男への皮肉、揶揄がこめられているものと思う。

④ ことさらに衣は摺らじをみなへし佐紀野の萩にほひて居らむ（二〇―二二〇七）

この一首のみ「雑歌」。「詠花」三三一首中に収載されている。「咲野」との原文表記の箇所は、一九〇五と同様にサクノと訓む説（岩波古典大系・『萬葉集全註釋』・『全訳注萬葉集』）がある。先の三首とは異なり、「をみなへし」の語が冒頭には置かれていない特徴をもっている。この一首、主眼は「萩」にあり、「をみなへし」は枕詞。歌は、「我が衣摺れるにはあらず高松の野辺行きしかば萩の摺れるそ」（二〇―二二〇一）と、想を同じくする。また、「思ふ児が衣摺らむにほひこそ島の榛原秋立たずとも」（二〇―一九六五）ともあり、「衣を摺る」ことは、元来女性の所業であった。佐紀の野に咲き盛る萩の花の美しさを賞美した作歌であるが、作者には見目麗しい女性が意識されているかと思われる。この作の「をみなへし」は、「佳人部為」と原文表記されている。

ちなみに、右にあげた四首のほかに、「をみなへし」を詠み込む歌には次の一〇首がある。

娘部思萩萩交じる蘆城の野今日を始めて万代に見む（八一―一五三〇）

娘部志萩萩折れれ玉梓の道行きつとと乞はむ児がため（八一―一五三八）

萩の花尾花葛花なでしこが花姫部志また藤袴朝顔が花（二〇―二二一五）

手に取れば袖さへにほふ美人部師この白露に散らまく惜しも（二〇―二二七九）

我が里に今咲く花の娘部四堪へぬ心になほ恋ひにけり（二〇―二二七九）

秋の田の穂向き見がてり我が背子がふさ手折り来る乎美奈敵之かも（二七―三九四三）

乎美奈敵之咲きたる野辺を行き巡り君を思ひ出たもとほり来ぬ（二七―三九四四）

ひぐらしの鳴きぬる時は乎美奈敵之咲きたる野辺を行きつつ見べし（二七―三九五二）

乎美奈敵之萩萩しのぎさ雄鹿の露別け鳴かむ高田の野そ（二〇―四二九七）

高円の宮の裾廻の野づかさすそまわりののに今咲けるらむ平美奈弊ひらみ之はも

―大伴家持―(二〇―四三二六)

おみなえしの名は、小さな粒々の花を飯粒に見立てての女飯(オミナメシ)から転じたものであるとも言われ、後には「女郎花」の字があてられている。

枕詞としてではなく、おみなえしそのものを歌っていると見えるこれらの作の中で、山上憶良(八一―一五三八)は「をみなへし」を「秋の七種ななくさ」の一つに数え上げている。「手に取れば袖さへにほふをみなへし」(二〇―二二―一五)と花の可憐な様を歌う歌があり、同季節に咲く萩ととりあわせておみなえしを賞美する歌が四首ある。また、花の咲く場所や作者の所作が具体的に歌い込まれていて、総体に、おみなえしは、たおやかな花として歌われている。

四

以下二首は、「かきつはた」を、咲キの意で地名の「佐紀」にかけて枕詞とした歌。

⑤ かきつはた佐紀沼の菅すげを笠かさに縫ぬひ着ぬむ日ひを待つに年としを経へにける

(二一―二八―一八)

これは、「問答」の歌二〇首中の二首で、男性の歌である。佐紀に住む相手を「佐紀沼の菅」に譬え、「かきつはた」は、女性の美しさを暗示している。早くに「萬葉代匠記」(精撰本)が、「笠二縫ハ約すくル譬、著ルハ逢あ譬ナリ」と説いている。「かきつはた」の花を衣の染料として用いたことの窺われる類想歌に「住吉すみのえの浅沢あさは小野ののかきつはた衣あそに摺すり付け着ぬむ日ひ知らずも」(七一―三六―一)があり、この歌においても、女性を我がものとして手に入れることが歌われている。結婚できないまま年月が過ぎたことを「着む日を待つに年を経にける」と嘆く男に答えて、

おしける難波なには菅笠すがかさ置き古ふるし後のちは誰たが着ぬむ笠かさならなくに

(二一―二八―一九)

と歌う女性の一首がある。「置き古し」の主体は、前歌の作者。「後は誰が着む笠ならなくに」は、「あなた以外の誰がかぶるものでもなく、(私は)あなたのものですのに」と恨み言を言いながらも相手の男を待っている趣である。「卑俗に近い問答である」と『萬葉集私注』には説くけれども、当意即妙のやりとりが興味深い。

⑥ かきつばた佐紀沢に生ふる菅の根の絶ゆとや君が見えぬこのころ

(二二―三〇五二)

卷一二に収める「寄物陳思」歌一三九首中の一首。上の三句「菅の根の」までは、次に来る「絶ゆ」を起こす譬喩の序である。足しげく通って来ていた男の訪れが遠のいたのを私と別れてしまうつもりなのかと不安に思い、相手を恨めしく思っている女性の歌である。「佐紀」は、作者の住んでいる所であった。枕詞としての「菅の根の」は、ネモコロや長シ・乱ルにもかかり、「山菅」を言う場合が多いが、この歌のように水辺の菅の根を言う例に「湊にさ根延ふ小菅ぬすまはず君に恋ひつつありかてぬかも」(二二―二四七〇)・「…鶴が鳴く 奈呉江の菅の ねころもに 思ひ結ばれ …」(二八―四二一六)があり、三〇五二の「菅」は、佐紀沢の水辺の菅である。この一首、さほどに深刻な思いが感じられないのは、民謡風で調子が良すぎるからであろうか。

ちなみに、右にあげた二首のほかに、「かきつばた」を詠み込む歌には、前掲七―三二六一を含む次の五首がある。

常ならぬ人国山の秋津野の垣津幡をし夢に見しかも

(七―一三四五)

住吉の浅沢小野の垣津幡衣に摺り付け着む日知らずも

(七―一三六一)

我のみやかく恋すらむ垣津旗につらふ妹はいかにかあるらむ

(二〇―一九八六)

垣幡につらふ君をゆくりなく思ひ出でつつ嘆きつるかも

(二二―二五二二)

加吉都播多衣に摺り付けますらをの着襲ひ狩する月は来にけり

―大伴家持―(二七―三九二二)

かきつばたは、その花を衣や紙に摺り付けて染料にしたところから、カキツケバナ(掻き付け花)の意が転じての名(「大言海」と考えられているが、本来は垣ノ旗(ハナ)で「東雅」(新井白石)に言う「垣下に咲きたつ花」の義であったかと思われる。「かきつばた」の語は、「につらふ妹」・「につらふ君」の枕詞として容貌の優れていることを言うのに用いられ、一七―三九二を除く四首(先にあげた二―二八一八・二二―三〇五二を含めれば「かきつばた」を詠み込む歌七首中の六首)までが「恋」の歌である。これは、『萬葉代匠記』(初稿本)が、七―一三四五を注して、「かきつばたは、紫にて、うるはしければ、色ある人にたとへ、夢はその人をうつゝともおほえぬはかり、ほのかに見えるによするなり」と言っているように、かきつばたが、美しい女性を想わせる花、水辺を彩る美しい花として萬葉人に注目されていたことを物語っている。

「佐紀」は、『日本書紀』垂仁天皇紀三五年冬一〇月の条に「倭の狭城池及び迹見池を作る。」（岩波古典大系）ともあり、古くから池・沼の地として知られ、おみなえしや、かきつばたが生えている所であった。「をみなへし」・「かきつばた」が枕詞となったのは、すなわち「佐紀」の地に生息する植物への連想によるものと考えられる。

また、先にあげた六首のほとんどが相聞の歌（七―一三四六も女性が意識されている。）であるように、「をみなへし」・「かきつばた」を詠み込む作歌に恋の歌が多いのは、これらの植物から美しい女性がイメージされたからであろう。「をみなへし」を、「佳人部為」・「美人部師」とも表記していること、「かきつばた」の歌に見られるように衣を摺り染めにするのは女性の仕事であったこと、などもこれらの花が女性への連想に繋がったことを窺わせる。

総体に、作者未詳の歌が、多くはおみなえし・かきつばたを賞美する民謡風の口調のよいものであるのに対して、作者名を記すやや時代の新しいものと思われる作歌には、これらの花と作者とのより深い接触が歌われていることも指摘できよう。

平城宮の北に隣接する「佐紀」の地におみなえしや、かきつばたの咲き盛るイメージから、栄えあるさま、さらには恋の成就することを意識された。併せて、おみなえしや、かきつばたの美しく咲く「佐紀」は、当時の大宮人たちのやすらぎの場、時として遊宴の地ともなったであろうことと思われる。